

『今月の天候と農作業』

通巻第5564号
2月号
平成26年 1月 31日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【概要】

<特に注意を要する事項>

期間の前半は、気温の変動が大きい見込みです。2週目は、気温がかなり低くなる可能性があります。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、低い確率60%です。

<1週目の予報> 2月 1日(土)～ 2月 7日(金)

期間の中頃は高気圧に覆われて概ね晴れますが、はじめと終わりは気圧の谷の影響で雨の降る日があるでしょう。※詳しくは、週間天気予報をご覧ください。

<2週目の予報> 2月 8日(土)～ 2月 14日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 2月 15日(土)～ 2月 28日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

早期水稲の収量を安定させるには、田植え後の低温害をいかに乗り切ることがポイントですが、そのためには適正な管理でがっしりとした健苗をつくりましょう。

1 播種

十分に浸種し催芽した種子粃を播種します。

育苗箱に2 cm の深さで床土を入れ、稚苗の場合は催芽粃で180 g 程度均一に播種し、苗立枯病等の防除を兼ねて、定められた濃度で薬剤をかん水し粃が隠れる程度に覆土します。厚播きは徒長苗になりやすくなるので注意します。複数の品種を扱う場合は、混じらないよう注意します。

2 出芽

気温の低い時期なので温度確保が大切です。段積みの場合は、地面と箱の間に隙間をつくり空気が循環しやすくなります。上段と下段で芽の伸長に差がでますので、積重ねは十段程度までとします。

平置きの場合は温度が上がりにくいので加温機が必要です。温度は28～30 $^{\circ}\text{C}$ を目標にし出芽長は5～10 cm 程度とします。32 $^{\circ}\text{C}$ を越えるとリゾプス菌（クモノスカビ）が発生しやすくなります。

3 緑化

広げた苗箱はかん水後、寒冷紗などで3日程遮光します。温度は昼間は25 $^{\circ}\text{C}$ 以下、夜間は15 $^{\circ}\text{C}$ 以上を保ち、この間は高温による苗の徒長や、急激な温度低下によるムレ苗及び苗立枯病に注意します。本葉一葉目が展開し二葉目が抽出し始めたら緑化を終えます。出芽から緑化までの温度や水管理は苗質に大きく影響し、この期間に苗の第一葉鞘高（腰高）を伸ばしすぎると軟弱苗になります。特に過剰なかん水は地上部の徒長や発根不足となるので注意しましょう。

4 硬化

硬化期間の前半は昼間は20 $^{\circ}\text{C}$ 以下、夜間は10 $^{\circ}\text{C}$ 以上を保つようにし、後半は徐々に外気にならしていきます。かん水は夕方行うと床土の温度を下げ湿度を高めてしまうので午前中に行います。

5 追肥

中苗や成苗は、播種後20日目と30日目頃に液肥を施用します。液肥は硫酸の場合、1回一箱当たり3 g を500 ml の水に溶かして散布します。これで窒素成分で一箱0.6 g になります。液肥を散布した後は、軽くかん水

して葉焼けを防ぎます。

◆ 麦類

1 穂肥

現在まで葉齢の進みや莖数確保は順調で、早いところでは今月末には幼穂形成期を迎えます。小麦では、穂肥を2月中旬に10㎡当たり窒素成分で2・5kg、加里で2kg程度施用します。多すぎると倒伏しやすくなるため地力や生育を考慮します。

2 土入れ

土入れは、肥料の流亡防止、雑草抑制や防寒などの効果があるので、麦が節間伸長期に入る前までに行います。

3 排水対策

麦は、湿害に弱い作物です。特に全面全層播栽培（ばら播き）などでは、ほ場周囲や条間に沿って3㎡間隔で作溝を行い排水対策に努めましょう。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 共通事項

中旬までは午前中の温度確保と、内張カーテンの開放による光線確保により光合成を促進します。下旬になると日射量も増え、最低気温も徐々に高まるため、加温機の稼働時間が短くなり、ハウス内湿度の上昇に伴う病害の発生が多くなりますので、夜温の高い日は内張カーテンの調節により、適度に加温機が稼働するようにします。また、収穫までの日数も短くなり、着果量も増えてきますので、追肥とかん水量を増やしていきませんが、1回の量を増やさず、かん水間隔を短くするなど、極端に栽培環境を変えないよう、こまめな管理に心掛けましょう。

◆ きゅうり

ハウス内の温度管理は、午前中28～30℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成のつる下ろし栽培では、「心止まり」になりやすいので、開花や収穫果の位置（生長点から3～4節目で開花、10節前後で収穫できるのが理

想)に注意します。開花節位が上がった場合には、強めの摘果を行うとともにかん水量を増やして、草勢維持に努めます。

◆ ピーマン

受光態勢をよくするため、下位節の徒長枝を摘除するとともに、中位節以降の側枝も伸びたものは2～3節で摘心し、下位節まで光が当たるようにします。ハウス内の温度は、午前中28℃、午後は徐々に温度を下げ夕方25℃、夜間18℃とします。

◆ トマト

果実肥大と着色促進及び食味向上のためには、日射量の確保と葉数確保が必要となりますので、日中の内張カーテンの開放と15～18枚程度の葉を確保します。下旬以降は、着色までの日数も徐々に短くなり、着果数も増えてくるため、かん水量を増やして草勢維持に努めます。

◆ いちご

いちごは、曇天が続くと成熟に要する温度が確保できず、成熟期間が長くなり、裂果等の品質低下が懸念されます。ハウス内の温度は、午前中25～28℃、午後20～25℃、夜間5～8℃とします。

曇天が続き、日中温度が上がらない場合には、着色促進のため夜温をやや高めに管理しますが、8℃を上限とします。また、大玉果、食味向上のため8～10果に摘果します。今年はハダニ類が平年に比べ多く発生しています。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗の除去はこまめに行い、定期的な薬剤散布を行います。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆ トンネル内の適正な温度管理

気温が低い時期なのでトンネル栽培では温度確保に努めますが、晴天日の日中は高温になる日があり、換気の必要な場合があります。レタスやスイートコーン、かんしょ、にんじん等トンネル栽培については開閉管理を徹底し適温管理に努めましょう。

◆ スイートコーン

大型、小型トンネル栽培のは種適期となります。スイートコーンは発芽と生育の適温域が大きく異なる品目です。発芽適温は30～35℃で管理することになります。発芽後は22～30℃を目途に換気します。

◆ レタス

生育適温は15℃～20℃です。高温管理は葉がよじれたり変形球になりやすく、寒害を受けやすくなりますので、日中は十分な換気を行ってください。

◆ 食用かんしょ

今月から来月にかけてが、トンネル栽培の挿苗時期となります。育苗ハウスでは採苗前の苗を外気温にもならしながら適温で管理し、徒長を防ぎ、充実した苗に仕上げます。挿苗予定の数日前に採苗した苗（取り置き苗）を用います。また、挿苗時には十分な地温を確保するため、トンネルは前日より密閉して地温確保（18℃以上）に努めます。地温が低かったり、徒長苗の利用など条件が悪いほど活着が遅れ、株当たりのいも数も減りやすくなるので、適正な管理を行い初期生育を促します。

◆ さといも

早生種の定植期になります。連作障害が出やすいので連作は避けます。また、栽培ほ場はセンチュウ消毒を行います。健全な種芋（30～50㍓程度）を選別し、センチュウや乾腐病の消毒を行って定植します。

◆ 畦立てマルチについて

これから播種・植付けする品目の発芽・活着促進は、地温と土壤水分を確保することが大切です。マルチングする時はほ場の土を片手で握ってみて団子になる程度を目安とします。逆に手が濡れるようなら過剰ですので適湿になるのをまって耕起します。

（河野 健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆ 完熟きんかん

完熟きんかんの出荷が最盛期を迎えます。これからは暖かくなり、過熟やウルミ果の発生が懸念されますので、ハウス内の温度管理に気を付けましょう。昼間は10～15℃を保ち、夜間は凍害に遭わないように注意しましょう。

収穫は、果実の着色程度や熟度に合わせた収穫を行いましょ。また、きんかんの果実は衝撃に弱いので、収穫・選果・選別は丁寧に行いましょ。

◆ マンゴー

赤い色の割合が多いほど、高品質の果実とされ、大玉ほど高単価で取引されます。このために重要となるのが、早期摘果と幼果期からの日照確保です。摘果の際は、極端な早期摘果を避け、果実の縦径が3㍍程度になったのを確認してから行いましょ。その後は、果実を吊り上げて、光が十分に当たるようにしましょ。果実の縦径が5㍍程度になったら、結果枝2～3本当たり1果に結果数を調整しましょ。

また、開花直後のアザミウマ類の発生は果実品質を大きく低下させます。発生に注意し、ハチを出した後はすぐに防除を実施しましょ。毎年カイガラムシの発生が見られる園では蜂出し後に防除を実施し、その後の発生に十分注意しましょ。

2 果樹園共通

◆ 土壌改良

果樹栽培において高品質と高収量を得るためには、土壌の通気性と排水性の確保が重要です。たい肥や稲ワラなどの有機物を施用し、土壌改良を行いましょ。また、特に通気性の悪い土壌では土を部分的に掘り起こし、有機物を混ぜ合わせることで土壌の通気性の改善を行いましょ。

土壌の酸性化や塩基バランスの崩れは、養分の吸収や根の生育を阻害します。土壌診断を行い、石灰・苦土資材を適正に施用しましょ。

(山口 和典)

花き

◆ 電照ギク

2～3月出荷の作型は最も暖房コストがかかる作型です。それぞれの品種、系統に適した変温管理でコスト削減に努めて下さい。低温が続いていますので、低温開花性でない品種は夜温だけでなく昼温の確保にも努めて下さい。施設の多層被覆によりハウス内の湿度が高まる時間帯が長くなります。換気による除湿や定期的な予防散布などを行い、病害防除に努めて下さい。除湿機能を持つ被覆資材の導入も効果的です。

「神馬2号」、「神馬66-4」の3～4月出荷作型の再電照開始は総苞りん片形成後期から3～4日間実施します。開始時期の決定は、最寄りの農業改良普及センターやJAに相談し、必ず「花芽分化の検鏡調査」を行った上で決定して下さい。

◆ スイートピー

今期は晴天が続いており、1月に気温が高い時期もあり、順調に収穫が行われたほ場では特に草勢の低下が心配されます。タイミングを逃さず草勢に応じたかん水及び施肥管理を早めに行ってください。液肥を施用する場合は濃度の高い液肥は根に障害を起こしますので、低い濃度で使用して下さい。

「花シミ」も発生しやすい条件になってきますので、換気に努めるほか、循環扇等でハウス内の空気を動かして水滴の付着を防ぐなど「花シミ」の軽減を図って下さい。また、定期的な生物農薬のダクト散布は灰色かび病対策に有効です。

◆ ホオズキ

7月出荷は2月上旬までの植え付け、8月出荷は中旬からの植え付けになります。土壌消毒を必ず実施し、ネコブセンチュウや白絹病などほ場に持ち込まないように、十分に注意して地下茎の選別・調整を行い、必要に応じて地下茎を消毒してください。萌芽時には、ほ場をこまめに巡回し、マルチに穴を開け、成長点の焼けを防いで下さい。

◆ デルフィニウム

沿海地域では2番花の収穫期から3番花の萌芽期になります。ボリュームを確保するため、適正な仕立て本数に整枝して下さい。

◆ トルコギキョウ

特に八重系のブラスチングや成長点の障害が心配されます。適正な温度管理に加え、不要枝、蕾の摘除、カルシウム剤等の葉面散布で発生の軽減を図って下さい。灰色かび病による花シミや花粉へのカビ発生対策には生物農薬のダクト散布が有効です。

◆ ラナンキュラス

1月後半から収穫量が増加していますので、草勢が低下しないように150ppm程度の濃度の液肥を定期的に施用してください。日中の温度管理は収量確保のため15℃程度を目安にします。

(中村 広)

畜産

今月は「家畜防疫強化月間」です。冬場、空気が乾燥し、気温が低下すると鳥インフルエンザをはじめ、様々なウイルスや細菌が活発に動くようになります。また家畜が寒冷ストレスを受けるため、病気が発生しやすくなります。農場に病気を侵入させないことが大切ですので、車両、人及び物の出入りには注意を払うとともに、消毒槽の設置など日常の衛生管理に努めましょう。

◆ 鳥インフルエンザ対策

1月に入り、韓国において高病原性鳥インフルエンザ（H5N8亜型）の発生が報告されました。過去2回（2007年、2011年）の本県での発生は、韓国内での発生から1ヶ月後に、韓国内での発生が継続している状況下で起こっています。作業や飼料・器材の搬入による人・物品・車両の動線や野生動物による伝播の可能性を踏まえた消毒を徹底してください。また、以下のことにも十分注意して下さい。①長靴は鶏舎ごとに履き替える。②防鳥ネットは2センチ以下の網目にし、野鳥や野生動物の侵入を防ぐ。③鶏舎の壁や穴はコンパネなどで補修する。④殺鼠剤や粘着シートを使いネズミを駆除する。⑤家禽の飲み水は塩素剤等で消毒する。

◆ 豚流行性下痢対策

12月以降、鹿児島県と本県でウイルスによる豚流行性下痢（PED）が続発しています。本病は、水様性下痢が認められ、特に哺乳豚での致死率が高いのが特徴で、治療は対症療法しかありません。養豚農家においては、ルートの工夫や消毒を徹底するなど、今一度防疫体制の徹底をお願いします。嘔吐や下痢など本病を疑う症状を示す豚がいた場合は、速やかに家畜保健衛生所への通報をお願いします。

家畜はご自分の大切な財産です。自分の財産は自分で守るということを念頭に、家畜防疫対策に万全を期しましょう。

◆ 自給飼料対策

円安が進み、濃厚飼料ばかりでなく輸入乾草の価格も高騰しています。経営の安定化のためにも自給飼料の確保に努めましょう。

冬場の牧草は、硝酸態を比較的多く含むものがあります。牧草を収穫する時、葉が青々しているものは要注意です。普及センターで事前に硝酸態をチェックし、安全を確認し、家畜に給与するようにして下さい。

(須崎 哲也)

特用作物

◆ 茶

1 春肥の施用

春肥は、一番茶をはじめ、二・三番茶の収量品質の向上に大切な肥料です。

時期は2月中旬～3月上旬を目安に施用します。肥料の種類や散布量は地区の基準に準じ、うね間全面に幅広く散布し、施肥後は根を傷めない程度に軽く攪拌しましょう。

2 春整枝の実施

春整枝の時期は平均気温10℃が目安です。平坦地では2月中旬から、山間地では3月上～中旬頃に実施しますが、一番茶の摘採期の集中を避けるため、品種の早晩の他、地域の微気象等を考慮し整枝時期を調整して下さい。その際は、整枝直後に急激な低温に当てないように天気予報に注意して実施して下さい。

整枝の高さは、葉層を8芽以上確保した上で、最終摘採位置から3～5芽

高い位置としますが、秋整枝を実施した茶園では、一番茶となる芽にかからない高さで丁寧に整枝して下さい。

また、萌芽15日前からは防霜対策が必要ですので、それまでに、防霜ファンやスプリンクラーの整備・点検も実施します。

3 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除時期は産卵開始時期の気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃の春整枝後になります。

地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるように散布して下さい。

4 製茶機械などの点検・整備

異物混入防止や品質向上のため、茶工場内の清掃や製茶機械の事前点検・整備・調整を早めに行いましょう。

(佐藤 邦彦)

◆ しいたけ

1 植菌と仮伏せ

植菌は、時期が遅れると害菌の付着が多くなりますので、暖地では遅くとも2月下旬までには終わらせましょう。

仮伏せは、植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進する作業で、菌糸の活着に必要な温度と湿度を保つ必要があります。排水や日当たりの良い場所に縦囲いする方法と、地際から40cm以下の高さに横積みする方法とがあり、本県では横積法が多く使われています。それぞれほだ木の周囲を笠木や遮光ネット等で風が当たらないように被覆し、上面は雨がよく通り、かつ日陰ができるようにして保温・保湿を図りましょう。

2 寒子づくり

袋掛けやビニール被覆を行い、保温・保湿を図り、良質なしいたけの生産に努めましょう。

3 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて若干早めに採取するなど、品質の向上に努めます。特にほだ木の表面を傷めないように、かつヒダに触れないように丁寧に採取しましょう。

採取後は速やかに乾燥し、湿気が入らないようにポリ袋などで密封し、箱に入れて冷暗所で貯蔵しましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、仮植と苗床管理が主な作業となります。苗の良否が本畑以降の生育に大きく影響しますので、健苗育成に努めましょう。

1 苗床肥土は排水・通気性・水もちが良く、病害虫がない良質な肥土を使用しましょう。

仮植は葉数5枚苗（米粒大までの葉数）を使用し、活着までは床面が乾燥しない程度にかん水を行いましょう。

活着後は夕方に床面が少し乾く程度にかん水し、かん水過多による病害や根腐れが発生しないように注意しましょう。ハウス内は日中、高温多湿にならない様20～25℃を目安に換気を行い、温度調整を行いましょう。

本畑移植7～10日前からは、苗の生育に応じて換気とかん水制限をして順化处理を行いましょう。

2 畦立は練畦防止のため、土壌水分に注意して行ないましょう。また、根張り促進のための地積確保と、排水対策も含めて30％以上の高畦にしましょう。被覆は早作早進のため透明マルチを原則とし、黄斑えそ病対策等必要に応じてシルバーマルチ等を活用しましょう。

3 春消毒や苗床での農薬使用は、使用基準に沿って最善の注意をはらいながら行いましょう。

(松元 貴光)

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

飼養衛生管理基準の遵守

～家畜の病気を防ごう～

平成22年4月に本県で発生した口蹄疫は、約30万頭もの家畜の尊い命を奪い、畜産業のみならず、地域経済や県民生活に多大な影響を及ぼしました。家畜伝染病の発生防止には、「発生の予防」が何よりも重要であり、家畜伝染病予防法に基づく「飼養衛生管理基準」が大きく見直されています。

新たな飼養衛生管理基準は、牛、豚、鶏、馬等の畜種別に分けて規定されておりますが主な内容は次のとおりです。

◆ 農家自身が、国内外の家畜伝染病の発生状況、防疫に関する情報を新聞、テレビ、インターネット等で最新の情報を入手するように規定されています。本県では携帯電話等に県の防災メールシステムを活用し、家畜防疫情報メールを登録することで情報を入手できるようになっています。くわしくは最寄りの西白杵支庁、各農林振興局及び家畜保健衛生所にお問い合わせください。



◆ 農場内に衛生管理区域を設定して、不要な人や車両の立入を制限します。衛生管理区域は家畜がいるところに限らず、飼料タンク、農機具庫、堆肥舎、作業用車両の駐車スペースも該当します。また、獣医師、家畜人工授精師等畜産関係者が飼養衛生管理区域内へ入場する場合、消毒できるように踏込消毒槽や消毒噴霧器等設置しておきます。衛生管理区域内専用の長靴、作業服を準備することも大切です。農場に入場する人には立入記録簿に氏名、所属、目的並びに立入日等を記録してもらいます。

◆ 野生動物による病原体の持ち込みを防止するために畜舎への侵入防止対策を図ります。また、飼槽が鳥の糞等で汚れていないか確認し、常に衛生的にしておきます。

◆ 農場に出入りする車両についても注意します。家畜の出荷や導入の際に使用する車両は、タイヤの他、荷台及び運転席等を含めて十分消毒する必要があります。その他飼料運搬車、畜産関係者の車両等入場の際には十分消毒を行います。

◆ 新たに導入した家畜はすぐに同居させず、別部屋、可能であれば別畜舎で2～3週間ほど隔離飼育します。出荷等で空いた畜舎は清掃、消毒を確実にします。

◆ 病気を早期に発見するために日頃から家畜の健康観察を行うことが重要です。食べ残しが残っていないか、水は十分飲めるか、目に活力があるか、耳がたれていないか、お尻は汚れていないか、歩行に異常は無いか、よく寝ているか等を観察します。異常が見られたらすぐに獣医さんや最寄りの家畜保健衛生所に相談しましょう。



(宮崎県畜産新生推進局家畜防疫対策課)

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜類	病害全般	—	<p>多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底します。特にコスト低減のため多重・多層被覆にしているところでは、換気が悪く病害の発生が助長される傾向があるので注意が必要です。</p> <p>ワタアブラムシでネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。</p>
	アブラムシ類	並	
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 灰色かび病 褐斑病 つる枯病	並 やや多 並 やや少 並	<p>うどんこ病の発生がやや多い状況です。うどんこ病は乾燥した条件下で、その他の病気は多湿条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。また、罹病葉は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。</p> <p>つる枯病は、発病前からの薬剤散布による予防に重点をおきます。</p>
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年、前々 年より多い やや多	
	病害虫全般※ (改植時の留意点)	—	
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病 黒枯病	並 やや多 前年と 同程度	<p>斑点病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。</p> <p>いずれの病害も、罹病葉等は重要な感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。</p>
	アザミウマ類	やや多	
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病※ うどんこ病	並 多 並	<p>灰色かび病の発生が多く防除情報を発表しています。</p> <p>葉かび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が多湿にならないようハウスの換気に努め、曇雨天が続く時は日中でも暖房機の送風を稼働させるなど除湿に努めます。薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統薬剤の連用は避けます。</p>
	タバココナジラミ類 トマト黄化葉巻 病 (TYLCV)	並 前年と 同程度	
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	並 並	<p>うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くする等発生初期の防除を徹底します。</p> <p>炭疽病を確認したときには、直ちに根ごと抜き取り適切に処理します。</p>
	ハダニ類 ※※ オンシツコナジラミ	多 前年と 同程度	

- 1) ※※は注意報、※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。